気付くと知らない場所にいた。

〈カタストロ〉との戦闘中、私は不可思議な現象に巻き込まれた。

そして、ここ――地球に来た。

同じように〈カタストロ〉も地球に来ていた。

どういった力が働いたのかは判らない。けど、〈カタストロ〉がいるなら戦わないといけない。

私は――〈機獣少女〉だから。

地球で再び相見えた〈カタストロ〉は変質していて、原形をとどめていなかった。〈カグツチ〉が言ったように、地球の環境に適応出来ていないのかもしれない。同じように、私のＭＢコアも活性値が下がり、本来の力が出せなかった。

結果、〈カタストロ〉には逃げられ、私は近辺を調査しながら捜索をした。

〈カグツチ〉の感知した特異な反応を頼りに移動すると、現地の少女と接触した。

少女の名前は流遠やみひめ。

地元の小学校に通う、ごく普通の女の子。

〈カグツチ〉の感知した特異な反応は、変質した〈カタストロ〉のものではなく、彼女の持つＭＢコアだった。

ＭＢデバイスである〈カグツチ〉の存在に共鳴したのか、やみひめさんのＭＢコアが活性化し、それを嗅ぎつけたかのように〈カタストロ〉も姿を現した。彼女を護るために展開した防御障壁により、残りの機力を使い果たした私は、〈カタストロ〉と刺し違えるつもりだった。

だがそれをよしとせず、絶体絶命の状況の中、ＭＢコアが機能不全を起こした私に代わって戦ってくれたのが、出会ったばかりの現地の少女――やみひめさんだった。

サイドストーリー #02

『私の戦う理由』

〈カタストロ〉を倒せはしなかったものの、結果的に私達は生き延びた。私の代わりに〈機獣少女〉となって戦ってくれた現地の少女――流遠やみひめさんのおかげで。

そして彼女の厚意で、私は彼女の家に招かれ、温かい食事と休息を得られた。一緒に『DVD』と呼ばれる記録媒体の映像を観て、感想を交わした。

やみひめさんは私より一つ上の小学六年生。歳相応の明るさと、人一倍の勇気と優しさを持った女の子というのが、私の感じた印象だ。でなければ、見ず知らずの私のために、命を危険にさらしたり、自宅に招いたりはしないだろう。

長い黒髪をポニーテールにしており、橙色の瞳は少し吊り目がちだが、攻撃的な感じはしない。身長や体格は年齢相応。やたらと私の胸に言及してくるのは……うらやましいのだろうか。

一言で言えば、普通の可愛い女の子。

こんな言い方は歳上に対して偉そうかもしれないが、それを許容してくれる――もしくは気にしない、そんなおおらかさを感じさせる。

話をしている間に、気付けば夜も深い時間になっていた。私を気遣ってくれたやみひめさんの言葉に甘え、私達は一緒のベッドで眠る事になった。誰かと一緒に眠るのは、いつ以来だろう。

「――あ。まだ、ちゃんと自己紹介してなかった！」

灯りを消して、眠りに就こうとした矢先に、やみひめさんが素っ頓狂な声を上げた。

「そういえばそうですね。もう、お互いに名前を知っているので、今更な気もしますが」

やみひめさんが〈機獣少女〉になってから、後でちゃんと自己紹介をすると言ってくれたのを思い出す。

「でも、やらなきゃ。私、やみひめ――流遠やみひめだよ」

「私はツバキ――フルネームはツバキ・タカチホと申します」

「名字は『タカチホ』なんだね。確か、九州に同じ地名の場所があるよ」

私の自己紹介を聞き、やみひめさんはそんな事を教えてくれた。

「ふぁ～……。そろそろ限界みたい」

「はい。続きは明日にしましょう」

「うん。今度こそ、本当におやすみ」

「おやすみなさい……よい夢を」

それは、私が自分自身に向けた言葉だったのかもしれない。

私は滅多に夢を見ない。あまり見たいとも思わない。

見ても、良い夢だったためしがないから。

●
●
●

「……」

眠れない。消灯してから、体感時間では三十分は経っていると思う。疲れた身体（からだ）は睡眠を欲しているはずなのに、意識が眠る事を拒否しているようだ。

私の隣では、すでにやみひめさんが小さな寝息を立てている。今日の出来事は彼女にしてみれば信じられない体験のはずだから、肉体的にも精神的にも、疲労は相当なはず。それは私も同じはずなのに。

（――眠れぬのか？）

唐突に、声を掛けられた。鼓膜を震わせない、意識に直接語りかけてくる声。

けど、私は驚かない。声の主を知っているから。

（はい。まだ気分が昂（たかぶ）っているのでしょう。私の生命兆候（バイタルサイン）を監視（モニター）していたんですか――〈カグツチ〉？）

私に声を掛けてきた相手――ＭＢデバイスである〈カグツチ〉に、そう答える。

これは一種のテレパシーだ。〈機獣（きじゅう）少女〉となった者は、ＭＢデバイスとの間に形成された経路（パス）を通じて、双方向の通信が可能となる。

（大事な相棒（パートナー）だからな。其方（そなた）の状態（コンディション）は常に把握しておかねばなるまい？）

私の問いに、〈カグツチ〉は悪びれもせずに答えた。それは正論だったから、私は反論する事も出来ない。

（今日のように誰かと接したのは久しぶりだったので、戸惑っているのかもしれません）

（ふむ。なるほどな）

そういえば、〈カグツチ〉と〈機獣少女〉の契約を結んでからずいぶんと経つ。だけど、個人的な話はあまりしていなかった気がする。

（良い機会です。眠るまで、少しだけ昔語りに付き合ってもらえますか？）

しばらく寝付けそうにないので、雑談をしてみるのもいいかもしれない。

（構わんぞ。其方が自分から話題を振ってくるのは珍しいしな）

（確かに雑談をする時は、いつも貴女（あなた）からでしたね）

（そうだ。其方は相槌（あいづち）を打つばかりだったな）

（今夜は逆です。けど、返事は要りません。これからする話は、ただの独り言ですから）

心得た――〈カグツチ〉はそう言うと、無言で私の言葉を待った。

それでは、昔語りを始めましょう。

●
●
●

私が児童養護施設に入ったのは、小学二年生の時だった。

理由は育児放棄（ネグレクト）。

学校から帰宅すると、リビングに母親の姿が見当たらず、寝室で頭まで毛布（ブランケット）を被って横になっていた。体調が悪いらしく、夕飯はテーブルに置いてあるお金でなんとかしてしてくれと言われた。

私は以前から興味があったコンビニ弁当を近所の店で買った。普段は母親の手料理が当たり前で、時々レストランなどで外食をする機会はあったが、夕飯に弁当を食べるのは初めてだったので、新鮮だった。

こんな機会は滅多にないと思っていたから。

だが、翌日も、その次の日も、同じ事が続いた。土日になっても母親は家事をせず、私に食事代を渡した。その間、父親は一度も帰宅せず、母親に訊（たず）ねても答えを濁された。

週明けになると私は小学校に登校し、母親はパートに出掛けた。

父親が帰宅せず、母親が家の事を一切しない。

それ以外は何も変わらない日々。

だが、そんな生活が一ヶ月ほど続いた頃に変化が起きた。

育児放棄の可能性があると、役所の人間が訪ねてきたのだ。

恐らく、通報したのは私が使っていたコンビニの店員だろう。今思えばだが、小学生が一人でコンビニを利用するのは珍しい。夕飯時に毎日弁当を買い、それが一ヶ月も続けば、不審に思うのも当然だろう。

きっと、通報をした人間は善意のつもりだったと思う。可愛そうな少女を救えたと、自己満足に浸っていただろう。

けど、私にしてみれば余計な御世話だ。

洗濯物が溜まれば、必要に駆られて洗濯機の使い方を覚えた。

昼は給食が出るし、朝と夜の食事代はテーブルに置いてあった。

光熱費は預金口座から勝手に引き落とされる。

つまり、私は何も困ってなどいなかった。

だが、役所の人間に踏み込まれた事で、私の日常は壊れた。

すでに身辺調査は行われていて、両親が離婚していた事を知らされた。私の親権は母親にあり、父親はすでに慰謝料を振り込むだけの他人になっていた。母親は心神喪失状態で

判断能力を失っており、役所の人間が踏み込んできたのをきっかけに、心が壊れた。

私は児童養護施設に預けられ、そこから学校に通うようになったが、そこに居場所はなかった。私の事情はすでに周知の事実となっており、好奇の視線を向けられ、腫(は)れもの扱い。

無責任な善意が、私の生活を滅茶苦茶にしてくれた。

あの状況のままでよかったとは言わない。

けど、通報をした人間は、私がどういう状況に置かれるかを考えなかったのだろうか？

答えは肯定(イエス)だろう。ただ『可愛そうな少女を助けなければ』と思っただけに違いない。

良識ある大人として、正しい行いをしただけなんだと思う。

『正しい行いの結果』までは考えずに。

私が施設に受け入れられなかった場合、通報した誰かは、私を引き取って育ててくれただろうか？

当然、否定(ノー)だ。

そんな義理はない。現実的にも無理だろう。

そもそも、本気で私を心配してくれていたのなら、直接声を掛けてくれればよかったのだ。そうすれば、助けなど必要ないと伝え、こんな事態にならずに済んだ。

結局、直接関わりたくはない。それでいて、見て見ぬふりも出来ない。だから、役所に通報して、何かした気になりたかったのだろう。

私を救って善人になりたかった訳じゃない。

私を見捨てて悪人になりたくなかっただけだ。

私のためじゃなく、自分のため。

人間の善意など、そんなものだ。

私はすっかり人間不信になっていた。

これが元々だったのか、施設に入ったのがきっかけだったのかは、もう判らない。

だが、この人間不信が原因で、施設内でも孤立したのは間違いない。

自分の事は自分でやり、周りと関わらなくても平気だったから、職員からは『手間がかからなくいい』くらいの認識だったが、子供達からは好意的に思われなかった。子供らしくない態度が『生意気』だとか『気に入らない』という感情につながったのだろう。私は敵意や悪意を向けられた。

しょせんは子供の嫌がらせだからと気にも留めなかった。職員も私が気にしていなかったので、特に子供達を咎(とが)めなかった。職員も仕事として働いている。余計な世話を焼いてトラブルを抱えたくはない。

けど、一人だけ私を気に掛けてくれる人がいた。

彼は施設の職員で、言ってしまえば愚直な人間だった。

馬鹿正直で真面目だから、いつも同僚に面倒事を押し付けられていた。子供達からは慕われるどころか、馬鹿にされていた。それでも嫌な顔ひとつせず、押し付けられた仕事をこなし、子供達の面倒を見た。

私は彼を心の中で『ケンジ』と呼んでいた。大昔に書かれた『雨ニモマケズ』という詩の主人公のようだったから。けど、その主人公に名前はない。だから、作者の名前であるケンジと呼んだ。

ケンジにしてみれば、私は施設の子供の一人だっただろう。彼は誰にでも同じように接し、世話を焼いていたから。

けど、私にそんな風に接してくる人間は、学校を含めてもケンジだけだったから、私にとって彼は異質な存在だった。

ケンジに対して特別な感情があった訳じゃない。むしろ、嫌いだったと思う。正確に言えば、苛立ち(いらだ)を感じていた。要領が悪く、いいように使われて、馬鹿にされて、それでも怒りもしない。それが、ひどく癇(かん)に障(さわ)った。

私には何の関係もないのに。

いつも独りでいる私に声を掛けてくるケンジを、私は無視した。それでも、めげずに私に構ってくるので、仕方なく話をするようになった。彼はこの施設の出身で、高校を卒業してから、職員として働くようになったらしい。

ケンジと話をするようになってしばらくすると、私の方が聞き役に回っていた。年齢は当時で三十手前だったと思う。独身で、恋人もおらず、休日に長時間外出をしたりもしないらしい。

彼が何を楽しみに生きているのか判らなかった。

そして気付いた――自分も彼と同じだと。

両親の庇護のもと、普通に暮らしていた頃もそうだ。特に何か好きな事があった訳ではない。ただ漫然と過ごしていただけ。それに不満も疑問もなかった。

子供などそんなものかもしれない。

だが、私はその事実に驚いた。

自分が如何(いか)につまらない人間だったか気付き、ショックだった。

その日を境に、私はケンジと話さなくなった。

無視するのではなく、気のない返事を返すようになった。

それでも私に声を掛けてくれるケンジに対して、私は罪悪感を感じるようになった。無

視していた頃は、そんなものは感じなかったのに。

そんな居心地の悪い関係が終わるきっかけが訪れたのは、しばらく経っての事だった。

施設の出資者の一人が、慰問という形で訪ねてきた。四十代くらいの男性で、いわゆる実業家だった。彼は施設内を見て回り、私を見止めると、その日は何事もなく帰って行った。

後日、私は職員から呼び出され、来賓用の個室に通された。そこで待っていたのは、先日慰問に訪れた出資者の男性だった。聡(さと)い子供だった私は、おおよその状況を理解した。人目に触れない個室で二人きり。部屋に通される前に『失礼のないように』と言い含められた。

これは恐らく、そういう事だ。

私のすべてを理解した表情を見て、彼も察したのだろう。何の駆け引きもなかった。無遠慮に身体(からだ)を触られた。

少しだけ抵抗した。恥じらって見せた。

その反応が気に入ったのか、彼は鼻息を荒くし、私の服の内側までまさぐるように触れてきた。

気持ち悪かった。

けど、相手は施設の出資者で、私は人身御供(ひとみごくう)にされたのだ。抗(あらが)ったところで、私に味方はいない。だったら、気に入られて、利用した方が利口だ。私はそんな浅ましい事を考えて、自分を納得させた。

自分に対する嫌悪感で死にたくなった。

もう、どうでもよくなった。

いっそ、舌を噛み切ろうかと思った。

けど、痛いのは嫌で、そんな勇気も気力もなかった。

結局、その日は身体を触られるだけで終わった。それ以上の事をする気はないのか。それとも、じっくりと楽しむつもりなのか。どちらにせよ、どうでもいい事だった。

着衣の乱れを直して廊下に出ると、今、一番会いたくない相手に出会(でくわ)した。

ケンジだ。

いつも通りの人畜無害そうな笑みを浮かべて、声を掛けてきた。彼は、私が何をされたか知らないだろう。知っていれば、こんな顔は出来ない。そういう人間だ。

理不尽なのは判っている。彼に罪はない。けど、私はそれが、ひどく腹立たしかった。

だから話した。洗いざらい、全部。個室で、誰に、何をされたか。事の間、私が何を考えたか。

仕方がない事も、ケンジにはどうしようもない事も。
私は彼の表情が絶望に歪むのが見たかった。
けして怒らず。
いつも静かに笑っている。
そんな彼の人間らしい顔が見たかったから。
判ってる。こんなのは私の八つ当たりで、ただ彼を困らせたかっただけだ。
やはり私はつまらない人間だ。
小賢しくて、浅ましくて、残酷なだけの――ただの子供だ。
そんな今更な自己嫌悪を感じつつ、彼を見上げた。
どんな顔をしているだろうか。
猥褻行為を行った男に対し、怒り狂っているだろうか。男を利用しようとした私を軽蔑しているだろうか。それとも、何も出来ない自分の無力さに、打ちひしがれているだろうか。
だが、答えはどれでもなかった。
ケンジは無表情に私を見下ろしていた。
『どうしてほしい？』
そう問われているようだった。
あの男を殺してほしいと言ったら、実行したかもしれない。
慰めてほしいと言ったら、私を抱きしめてくれたかもしれない。
ケンジは愚直な人間だから、自分で決められない。
だけど、自分の意見を強要もしない。
ケンジは愚直な人間だから、言われたら逆らわない。
だけど、それは私みたいにあきらめてるんじゃなくて、自分を納得させてるんだ。
どちらも自己完結で、傍から見れば同じに思えるかもしれない。
けど、違うと思う。本人にしか判らない事だけど、それは決定的に違う。
彼の無表情な瞳に見つめられて、そんな事に初めて気付いた。
ケンジは愚か者じゃない。
周囲に見下されている彼を、誰よりも見下していたのは私だ。
本当に愚かだったのは、私の方だったんだ。
愕然とした。
身も世もなく泣きじゃくりたかった。
けど、これ以上、ケンジに甘えたくなかった。

だから私は『何もしなくていい』と、澄まし顔で言った。

ケンジはそれで何も言わず納得してくれた。

〈機獣少女〉の適性が判明したのは、その直後の事だった。季節に一度行われる健康診断、その項目の一つにＭＢコアの活性値の検査がある。これが基準値を超える者には、〈機獣少女〉になるための道が開かれる。訓練を受け、ＭＢデバイスと契約を行って〈機獣少女〉になれば、戦死しない限り、路頭に迷う事はない。

私は、即決で訓練施設への入居を希望した。

私に出来る事がある。それがただ、嬉しかった。

やりたい事なのかは判らなかったが、やってみればいいと思った。

駄目だったら、違っていたら、その時はやめればいい。

私はネガティブなんだかポジティブなんだか、どちらともとれない思考をするようになっていた。

ただ、この決断で少しだけ世界が変わった。

私を嫌っていた子供達の大半が、私を怖がるようになった。一部は掌を返したように友好的になった。私が〈機獣少女〉になった際の報復を恐れているのだろう。

職員の私に対する態度に、そこまで露骨な変化はなかったが、ケンジに対する態度が変わった。私がケンジにだけは懐いているように見えていたのだろう。ケンジに横柄な態度をとったり、面倒事を押し付ける頻度が低くなった気がする。

当の本人は気付いていないかもしれない。彼は愚直だから。

だけど、私は嬉しかった。ケンジのために何かが出来た気がして。

彼は自分の境遇を不満に思っていなかったかもしれない。だけど、私は彼の扱いに対して、不満を持っていたから。

自己満足だけど、これが本当に嬉しいという感情なんだと知った。

だから私は絶対に〈機獣少女〉になろうと決めた。今は自分のためじゃないかもしれないけど、ケンジのためだけど、いつか自分のためにと思える日が来るように。

●
●
●

（そうして私は訓練施設に移って、貴女と契約し、〈機獣少女〉となりました）

照明が消された暗い室内で、しかも声に出さない念話なので、時間経過はよく判らない。

ただ、〈カグツチ〉は黙って聞いてくれていた。

余談だが、私に猥褻行為を働いた男からは、謝罪文と共に巨額の『寄付』が届いた。

私が〈機獣少女〉の適性を見出されたと知り、大慌てで対応したのだろう。児童養護施設に出資している実業家と、人々の平穏を守るために戦う〈機獣少女〉。どちらが偉い訳でもないが、彼の行いを今の私が告発すれば、彼の社会的な立場はなくなる。

私は『寄付』に感謝しますという文面を返し、それでこの件は終わり。直接謝罪の言葉を言うでもなく、文面とお金で解決しようとした時点で、彼に対する嫌悪も期待もなくなっていたから。

更に余談だが、私に宛てられた『寄付』は全額、施設に預けた。

（この話には続きがあります）

ここまでは長い前置きだ。

〈機獣少女〉となり、初陣を経験し、正式に担当地域を割り振られる前に、私は休暇を与えられた。家族や友人などの親しい相手に挨拶をしたり、身辺整理をするための時間なのだろう。だから、私は母親の入院している病院を訪ね、意識はあるが、私を認識はしていない母親に、今日までの事を話した。

半年ぶりに会った母親は、別れ際に見た時よりも健康そうに見えた。心の問題に治療のマニュアルはないが、時間が解決してくれるというのも、あながち間違いではないのかもしれないと思った。

時間が出来たらまた来ると言って、私は病室を後にした。母親は終始、穏やかな表情を浮かべているだけで、何の反応も示さなかった。

病院を出た私は、ケンジに会うために児童養護施設に向かった。

施設を出て約半年ほどだが、帰ってきたそこは、ひどく懐かしく感じられた。ここで過ごした期間もまた、半年ほどしかなく、懐かしむような思い出もないのだが、それでも。

職員達はどこかぎこちない笑みを浮かべて私を迎えてくれた。

だが、そこにケンジの姿はなかった。

ひどく嫌な予感がした。職員達の空気が、彼については触れるなと言外に匂わせていた。

だが、訊かねばならない。私は彼に会いに来たのだから。

そして、私は知った。

彼が施設にいない事を。

もう、この世界のどこにもいない事を。

私が施設を出て、まだ何日も経たない頃、交通事故に遭ったそうだ。珍しく休日に外出をし、その帰りでの事だったらしい。

ほぼ即死。何の事件性もない、正真正銘の不運な事故。

その話を聞き、どうやって訓練施設の寮の自室に帰ったのかは覚えていない。気付くと

日付が変わっていて、私は出掛けた際の服装のまま、ベッドに横になっていた。

休暇期間の最終日まで、私は茫然自失状態で過ごした。明日の朝には辞令が下りて、そのまま担当地域に移動する。そろそろ眠らなければいけない時間になっても、寝付けなかった。ずっと寝ていた気がするし、ずっと起きていた気もする。今、本当に起きているのかすら怪しかった。もしかしたら、目覚めたら両親がいて、育児放棄も、施設での生活も、すべて夢だったりしないだろうか。そんな事すら考えた。

また、どうでもよくなった。

何もかもが、本当にどうでもよくなった。

ケンジが何をした？

悪い事など何もしていない。真面目に生きて、それで損ばかりしているのに、嘆きも悲しみもしなかった。

そんな人間が、どうして、こんな理不尽な死に方をしないといけない？

生きている価値のない、他人を傷つけたり、食い物にしている悪人がのさばっているのに、どうして彼等には罰が下らない？

きっと関係ないのだ。

善人だろうと悪人だろうと、不幸は平等に訪れる。

そう。こんな時ばかり、世の中は平等なのだ。

善（よ）い行いをしていれば報われる訳じゃない。

悪い行いをしていれば咎（とが）められる訳じゃない。

なら、真っ当に生きる事にどれだけの価値がある？

正直者が馬鹿を見るしかないのなら、そんな生き方にどれだけの意味がある？

本当にこの世界は理不尽だ。

そんな言い知れぬ虚無感に苛（さいな）まれていた時だ。上着のポケットに何か入っている事に気付いた。小さな紙袋だった。可愛らしいプレゼント用の包装で、メッセージカードが付いていた。そこに書いてあった宛名を見て、私の心臓が跳ねた。

『ツバキ・タカチホ』――私の名前だ。

思い出した。事故に遭ったケンジが抱えていたバッグに入っていたもので、私宛だったからと、職員が保管してくれていたものだ。

紙袋のサイズから言って、中身は小物か何かだろう。私は、何の躊躇（ちゅうちょ）も逡巡もなく、中身を取り出した。

それは髪留めだった。ささやかな意匠を施された、赤いシュシュ。

反応に困った。どういうつもりでケンジはこれを買ったのか。これは可愛いのか。可愛

かったとして、私に似合うのか。今の低下した思考回路では、何一つ判断出来なかった。
そして、メッセージカードが二つ折りで、本文がある事に気付いた。
そこにはケンジの筆跡で、私に宛てたメッセージが添えられていた。

『今までの君の人生が幸福だったかは判らない。幸福でないと感じていたなら、これから幸福になればいい。君はこれから、いくらでも幸福になれるんだから』

なんの捻(ひね)りもない、愚かしいまでに真っ直ぐな言葉は、彼らしいと思った。
彼は最後まで、愚直な人間だったのだ。
(私が彼に感じていた苛立ちは、きっと憧れだったんです。愚かでもいいから、真っ直ぐに生きていた、彼のようになりたかったんです。でも、私はそれを認めたくなかった……)
本当に人間はどうしようもない。
気付いた時には手遅れで、失うまで大切なものの価値に気付かない。
(彼の最後の言葉を読んで決めました。愚直な人間が、愚直なままでも、幸福になれる世界になればいい。私は世界を変えられないけど、世界を守る事は出来るから。そのために私は戦おう。そう決めました)
私は愚かだけど、真っ直ぐには生きられないけど、少しでも愚直な人間になりたい。
ケンジのような。
(これが今日までの私のすべてです。私が戦う理由です。幻滅しましたか?)
(――いや。私にとっては好ましい理由だ。幻滅する理由もない)
(よかった。返事がないので、自己診断状態(スリープ・モード)に入ったのではないかと不安でした)
これは照れ隠しだ。昔語りなど、らしくない事をしたから。
(返事は不要と言ったのは其方(そなた)であろう?)
普段通りの〈カグツチ〉の言葉に、私は苦笑を返す。
(そろそろ眠れそうです。ありがとうございます、聞いてくれて)
(よい。其方という人間を、本当の意味で知る機会になったのだから)
(今までに見せた私が嘘という訳ではありませんよ?)
(承知しているつもりだ。野暮な事は言うな)
憮然とした口調だが、気を悪くした様子ではない。〈カグツチ〉のこういう実直なところは好感が持てる。彼女もまた、愚直な性格なのかもしれない。
……ん、本当に眠くなってきた。記憶を整理し、気持ちを吐き出した事で、心が軽くなったためかもしれない。

（おやすみなさい、〈カグツチ〉）
（うむ、ゆっくり休め――良い夢が見られるとよいな）
そうだといいな。
〈カタストロ〉への対策。
ゼヘナに帰る方法。
帰れなかった場合の対応……。
考えなければいけない事はたくさんある。
だけど、今は眠ろう。
疲れた頭で考えても、妙案など浮かばないのだから。
私は滅多に夢を見ないけど。
見ても、良い夢だったためしがないけど。

今夜くらいは、素敵な夢を――

END

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』の番外編、サイドストーリー#02をお届け致します。

今回はツバキ視点のお話でしたが、いかがでしたでしょうか？

久方ぶりに辛気臭い話を書きました。

『ゾイやみ』は、短編でも過去作の加筆修正でもない小説としては、実に一年ぶりくらいの作品です。なので、リハビリとか実験的な意味合いを持っています。

で、今回のお話を書いていて感じたのは、辛気くさい話の方が書きやすいな――でした。

旧サイト時代の『狂襲姫』のカグヤ、『あなたといるから』のカナコ、そして今回のツバキ――うん。やっぱり辛気臭い（面倒くさい）女の子って可愛い。

そうじゃない女の子（やみ子とか）を可愛く書くのも、本作の実験の一つです。

ちなみに、やみ子は本当に普通の女の子です。このお話のツバキの聞き役が〈カグツチ〉だったのは、『普通の女の子である』やみ子に、どんな反応（はんのう）をさせるのが正解か決めかねたからです。

ツバキももう、ケンジにしたように、同じ事を繰り返したくはないでしょうし。

余談というか、言うまでもない事ですが、劇中に登場する『雨ニモマケズ』は宮沢賢治のものです。小学校の国語の授業で初めてこの詩を読んだ時の事は忘れましたが、今になって思うと理想論だと感じます。人間にこんな生き方は出来やしないと。

でも、理想論だからこそ憧れる気持ちもあります。

僕には出来ない生き方ですが、それだけに。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。もう一人の主人公・ロリきょ――もとい、ツバキはどう映ったでしょうか？　出来れば、気に入ってい

ただけると嬉しいです。

それでは、次は本編・第四話でお会いしましょう。

※追記

この作品はあくまでフィクションです。僕個人は児童養護施設や、その職員・関係者に対し、偏見や特別な感情はありません。今年放送された『明日、ママがいない』も観ていません。

２０１４／11／25　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る